妊娠とお薬のはなし

「私がのんだ薬のせいで、赤ちゃんに何か悪いことが起きたらどうしよう」

妊婦さんなら誰もが不安に感じることです。でも、薬の種類、服用する時期、薬が必要な理由・・・それは一人ひとり違います。

ここでは一般的な「妊娠と薬」について紹介しますが、答えはみんな同じではありません。薬について心配なことは、どんなことでも気軽に当院薬剤師にご相談ください。皆さんが安心して薬物治療を受けられるようサポートしていきたいと思っています。

《目次》

1．どうしてお母さんの薬が赤ちゃんに影響するの？
2．お父さんが使う薬は赤ちゃんには影響しない？
3．薬は赤ちゃんにどんな影響を与えるの？
4．薬以外は赤ちゃんに影響しない？
5．やっぱり薬は使わない方が安全？
6．このお薬、続けていて大丈夫なの？
7．こんなときはどうしたらいいの？
　①発熱、頭痛、歯の痛み　②風邪を引いたとき　③肩や腰の痛み
　④アレルギー性の鼻炎や花粉症　⑤インフルエンザ
8．漢方薬は安全？
9．サプリメントや健康食品は大丈夫？
10．産婦人科で処方されるお薬には、どんなものがあるの？
　①張り止め　②鉄剤　③便秘薬

１．どうしてお母さんの薬が赤ちゃんに影響するの？

一般に、お母さんがのんだ薬は胃や腸から血液に入ってお母さんの全身をめぐります。その途中で酸素や栄養素と一緒に胎盤を通って赤ちゃんの体に入っていくことになります。

目薬や湿布など、のまない薬も粘膜や皮膚から血液に入っていくので、赤ちゃんの体にも入っていきます。注射薬、のみ薬よりも赤ちゃんの体に入る薬の量は少なくなりますが、注意をしておく必要はあります。

２．お父さんが使う薬は赤ちゃんには影響しない？

　多くの薬は影響しません。ただし抗ウイルス薬など、一部の薬に注意が必要なものがあり、避妊の必要な期間が決められています。妊娠成立後は、精液を介して薬がお母さんの体に入る可能性があるので注意が必要です。

　詳しくは薬剤師におたずねください。

３．薬は赤ちゃんにどんな影響を与えるの？

　薬の影響には、「先天異常」と「胎児毒性」のふたつがあります。
一般的にお薬を使う時期によって影響は違ってきます。「初期を過ぎればお薬の心配はない」ということはありません。どの時期にもやはり注意は必要です。

　もちろん、薬の種類によっても影響は違ってきます。赤ちゃんに影響する可能性が高い薬も確かにありますが、全ての薬が赤ちゃんに影響を与えるということではありません。

＜先天異常＞

　生まれつきの体のつくり、体の機能の異常のことをいいます。多くは、受精卵から人間の形へ、いろいろな器官や臓器が作られる時期に影響を及ぼします。（妊娠2ヶ月から4ヶ月がこの時期にあたります。特に重要なのは2ヶ月目です）

＜胎児毒性＞

　赤ちゃんが大きく成長する中期から後期、出産までの時期に胎盤を通って赤ちゃんの体に入ったお薬の作用により、赤ちゃんの体に起こる有害な影響として、以下のようなものが知られています。

・赤ちゃんの発育が悪くなる
・羊水が減る
・赤ちゃんの臓器への障害
・陣痛や分娩を予定日前に進めてしまう、
　あるいはなかなか進まない
・赤ちゃんの体に残った薬の影響で、出生後の赤ちゃんに
　一時的に起こる元気がない、怒りっぽくなる、痙攣が起
　こるなどの症状

４．薬以外は赤ちゃんに影響しない？

　健康で、まったく薬を使っていないお父さんとお母さんから産まれる赤ちゃんであっても、100人のうちの2～3人には産まれたときに何らかの異常が見つかるといわれています。「薬を使わないから、全く心配ない」というわけではありません。

　原因はわからない場合が多いですが、偶然に起こってしまう遺伝子や染色体異常のほか、感染症やタバコ、アルコール、放射線などの環境要因もあります。

5．やっぱり薬は使わない方が安全？

必要でない薬は、できるだけ使わないのが一番です。ですが、お薬には「お母さんの病気の治療に必要なもの」、あるいは「お母さんと赤ちゃんのために必要なもの」もあり、全てを排除することはできません。

必要なお薬を見極めて、必要な期間はしっかり服用することが大切です。

６．喘息の薬、甲状腺の薬、けいれんの薬、精神科の薬…
このお薬、続けていて大丈夫なの？

お母さんの病気の治療に必要な薬は、自分の判断で服用を中断しないでください。のみ続けることはとても不安だと思いますが、薬を中断することで、お母さんの病気が悪化する可能性もあります。お母さんの病気が悪化することで、赤ちゃんに好ましくない影響を与えてしまう場合もあります。

お母さんが喘息発作を起こすと…
お母さんはもちろん赤ちゃんだって
苦しくなってしまいます…

お母さんの病気を悪化させないことはもちろんですが、赤ちゃんへの影響をできるだけ減らすことも考えてあげたいですね。

妊娠中の治療については、かかりつけの先生とよく相談して決めていきましょう。

7．こんなときはどうしたらいいの？

妊娠中に起こるかもしれない症状と、対処するための薬について紹介します。

①発熱、頭痛、歯の痛み

妊娠中には避けておきたい熱さまし、痛み止めがあります。

○アセトアミノフェン

初期、中期、後期どの時期にも使える薬です。
主に病院で、処方されるお薬です。市販薬にもこれと同じ成分のものがありますので、ご相談ください。

×アスピリン、イブプロフェン、ロキソプロフェンなどの消炎鎮痛剤

特に妊娠後期は赤ちゃんに影響するので使わないで下さい。
病院のお薬以外にも、薬局などで売られている多くの市販薬（痛み止め、熱さまし、かぜ薬等）に含まれているので注意が必要です。

②風邪

次の漢方薬は市販されており、使うことが出来ます。病院でも処方されます。

○葛根湯　　（風邪などによる頭痛、発熱、悪寒など、肩こりにも）
○麦門冬湯　（咳、たん）
○小青竜湯　（鼻水）

市販薬はいろいろな成分が入っており、なかには注意が必要な成分もあります。自分で判断せず、産婦人科や、近くの内科などを受診して、より安全性が高く、症状にあった薬を選んでもらうようにしましょう。

受診のとき、薬局で薬をもらうときには、
必ず妊娠していることを伝えてください。

③肩・腰の痛み

湿布、塗り薬も、「絶対にダメ」ではありませんが、使いすぎには注意が必要です。

湿布や塗り薬には、あまり抵抗を感じないかもしれません。しかし、お母さんが何枚もの湿布を何日もはり続けたら、実際に赤ちゃんに影響が出たことが報告されています。インドメタシン、フェルビナク、ジクロフェナク、ロキソプロフェンなどの消炎鎮痛剤が入った湿布や塗り薬がたくさん市販されています。病院でも処方されています。**妊娠後期は特に注意が必要です!!**

★「サリチル酸メチル」が成分の湿布は、問題なく使うことが出来ます。

④アレルギー性鼻炎、花粉症

　点鼻薬（鼻のスプレー）や点眼薬といった外用薬は、身体にほとんど吸収されないため、赤ちゃんへ成分が移行しにくいです。しかし、使いすぎないよう、使い方を守ることが大切です。市販の薬でも使えるものもあります。相談してみましょう。

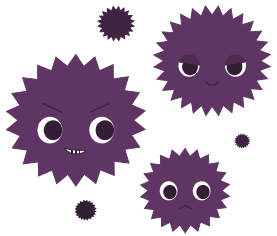
　点鼻薬、点眼薬だけでは症状が治まらず、集中力がなくなるなど普段の生活にも困るという場合には、アレルギーの飲み薬についても先生に相談してみましょう。赤ちゃんに対して安全性が高い薬から提案します。

⑤インフルエンザ

【ワクチンについて】

お母さんだけでなくお父さん、同居の家族にも、予防接種はおすすめです。インフルエンザワクチンは不活化ワクチンです。初期、中期、後期のいずれの時期に接種しても、接種しなかった場合に比べて先天異常や流産、早産が起こりやすくなることはありません。予防接種をしても、感染を完全に防げるわけではないので、流行する時期には、マスク・手洗い・うがいをしっかりやりましょう。

★授乳中でもインフルエンザワクチンは接種できます



【感染してしまったら】

飲み薬や、吸入薬などの抗ウイルス薬を使うことができます。
これらの薬は、妊娠中に使用しても先天異常、流産、早産の割合が増えることはありません。ウイルスのお薬には熱を下げるはたらきはないので、熱さまし（**アセトアミノフェン**）を併用することもあります。

８．漢方薬は安全？

　漢方薬、ハーブ類にも注意が必要なものはあります。特に便秘に効果のある漢方薬は、子宮の収縮を引き起こしてしまうことがあります。
　まず医師・薬剤師に確認しましょう。

９．サプリメントや健康食品は大丈夫？

いずれも、私たちが食品から摂取する栄養素が成分です。基本的に危険なものではありませんが、これにたよらず、バランスのよい食事をとるのがいちばん大切なことです。

＜葉酸＞

ビタミンB群のひとつです。
赤ちゃんの神経管閉鎖障害の予防に効果があり、妊娠前から3ヶ月までは食品からの摂取に加えて、1日0.4mgの摂取がすすめられています。

＜ビタミンＡ＞

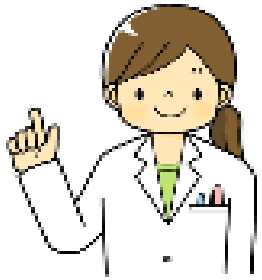
レバーややつめうなぎに多く含まれる脂溶性ビタミンです。
とりすぎには注意が必要で、あえてサプリメントでプラスする必要はないでしょう。

10．産婦人科で処方されるお薬には、どんなものがあるの？

　妊娠中によく処方されている薬を紹介します。これまでに、たくさんの先輩ママが使用している薬です。もちろん、先天異常の割合が増える薬はありません。

①張り止め（流産や早産を予防するお薬）

そんなに張っていないけど、飲まないといけないの？
と感じることもあるかもしれません。流産、早産を予防する大切なお薬ですから、指示を守って飲みましょう。



・リトドリン

妊娠16週以降で処方されます。
お薬を飲んでから1～2時間は、心臓がドキドキしたり、手がふるえたりすることがよくありますが、一時的な症状なので心配はありません。
薬を飲むだけでなく、安静にすることも大切です。

②鉄剤（貧血を治療するお薬）

鉄は酸素の運搬や赤ちゃんの発育に必要なものです。お母さんが重症の貧血になるとお母さんだけでなく赤ちゃんにも影響が出ます。
妊娠中は特に貧血の薬を飲むと、吐き気がしたり胃が痛くなることがあります。薬の種類、飲むタイミングを変えることで症状が軽くなる場合があります。医師、薬剤師に相談してみましょう。

③便秘薬

- **酸化マグネシウム**
  便中の水分を増やすことで、便をやわらかくするお薬です。すぐには効かないことも多いですが、毎日使っても、くせにはなる心配はありません。排便に応じて、のむ回数や錠数を自分で調節しましょう。

- **ピコスルファートナトリウム、センノシド（センナが成分のお薬）**
  大腸を刺激して排便を促すお薬です。飲みすぎると子宮の収縮を引き起こす可能性もあるので、飲みすぎには注意が必要です。

薬に関してわからないことは、
医師・薬剤師に気軽にご相談ください。